主論文の要約

（Abstract of Dissertation）

論文題目：　日本語母語英語学習者の CMC 対称型クローズドタスクにおける目標言語習熟度の影響

氏　名：　伊藤　隆

論文内容の要約：

英語教師が学習者のペアを組む際に、性別や性格と並んで、目標言語習熟度は考慮に入れやすい要素である。２人の習熟度が同程度になるようにペアを組むこともあるであろうし、あえて差をつけてペアを組むこともあるかも知れない。しかし、「英語の得意な者が苦手な者と行う活動から学ぶことはあるのか。得意な者同士で組む方が積極的になるのではないか」「英語の苦手な者は得意な者に頼りきったまま活動を終えることはないのか。苦手な者同士で組む方が主体的に学ぶのではないか」というような素朴な疑問が生まれてくる。このような疑問に応じられるような教育的な示唆を導き出すことを、本研究は目指している。

外国語学習者ペアの目標言語習熟度がインタラクションに及ぼす影響を調べた先行研究を概観すると、「意味の交渉 (negotiation of meaning)」を分析した研究と LRE (language-related episode)」を分析した研究の結果には、それぞれ一定の傾向が見受けられる。意味の交渉とは、コミュニケーションがうまくいかないときに、相手が理解しているかを確認したり相手に言い直してもらったりして、問題を解消しようとすることである。意味の交渉を分析した先行研究では、２人の習熟度が同等ではなく差のある方が、意味の交渉が活発に行われていた。２人の習熟度が違う方が、コミュニケーションに支障をきたす可能性が高いと考えると、この結果は納得できるものである。一方、LRE は、２人のインタラクションで文法や語彙などの言語に関わることが話題になる箇所を指す。LRE を分析した研究では、２人の習熟度の合計が高い方が LRE の総数も適切に解決される LRE の数も多かった。習熟度の高い２人で組む方が、ペア単位では目標言語についての知識を豊富にもっていると考えると、この結果は理解できる。以上のような先行研究の知見を踏まえて、本研究では意味の交渉と LRE 以外の側面を分析対象とし、２つの調査を実施した。調査１は調査参与者間計画で、調査２は調査参与者内計画である。

調査１の調査参与者は、日本語を母語として英語を学ぶ大学生 188 名である。彼らは、SLEP テスト (Secondary Level Proficiency Test) の結果をもとに、目標言語習熟度の相対的上位者（以下、「上位者」）81 名と相対的下位者（以下、「下位者」）107 名の２グループに分けられた。SLEP テストのマニュアルによると、上位者は中級者 (high & low intermediate) に、下位者は初級者と初心者 (elementary & beginner) として位置づけられる。データ収集前日までに、「上位者と下位者」「上位者同士」「下位者同士」の３種類のペアを組んでおき、各ペアが使う BBS (bulletin board system) の番号も決めておいた。データ収集当日、各調査参与者に、タスクに使う絵、解答用紙及び BBS 番号を渡した。タスクのやり方を説明する問題文を読み上げ、その後でパソコンから一斉にログインしてもらった。本研究で使ったタスクは、「対称型クローズドタスク」と呼ばれるタイプである。対称型クローズドタスクでは、ペアを組む２人がタスクをやり遂げるのに必要な情報を半分ずつもっており、協力して問題を解決することを求められる。対称型クローズドタスクの中でも、最も典型的な「間違い探し (spot the difference)」と呼ばれるタスクを使った。ペアを組む２人がそれぞれ持つ絵は似ているが、10 か所の違いがあった。その 10 か所の違いを、ペアの相手と BBS 上で英語を使ってやりとりして見つけ出し、解答用紙に記入することを求めた。40 分後にタスクを止めても

らい、最後に情意面に関する質問紙に記入してもらった。質問紙では、タスクをやり遂げる自信に関わる「期待」、タスクをする必要性に関わる「価値」、タスクに取り組もうという決意に関わる「意図」の３つの構成概念を７件法によって測ることを試みた。

調査１のデータ分析では、上位者と下位者それぞれについて１種類ずつ計２種類の比較をした。上位者は a)「下位者と組んだ者と上位者同士で組んだ者」の比較であり、下位者は b)「上位者と組んだ者と下位者同士で組んだ者」の比較である。データ分析では、トランスクリプトをもとに、各調査参与者が産出した語数、AS ユニット数、AS ユニットあたりの語数及び語彙の複雑さの指標となる *D* を算出した。そして、トランスクリプトと解答用紙をもとに、問題解決数を算出した。さらに、質問紙をもとに、期待、価値及び意図の数値を算出した。

調査２のためのデータ収集を、調査１の翌週に行った。調査参与者、タスク及びデータ収集の手順は調査１と同じである。ただし、各調査参与者は、ペアを組む相手を変えて類似のタスクを再度行った。ここでのデータを調査１の結果と比べて分析し、調査２の結果とした。調査２のデータ分析では、上位者と下位者それぞれについて２種類ずつ計４種類の比較を行った。上位者については、1)「１回目に下位者、２回目に上位者と組んだ（相手の習熟度が上がった）者と、２回連続で下位者と組んだ（相手の習熟度が変わらなかった）者の比較」と 2)「１回目に上位者、２回目に下位者と組んだ（相手の習熟度が下がった）者と、２回連続で上位者と組んだ（相手の習熟度が変わらなかった）者の比較」の２種類である。下位者については、3)「１回目に下位者、２回目に上位者と組んだ（相手の習熟度が上がった）者と、２回連続で下位者と組んだ（相手の習熟度が変わらなかった）者の比較」と 4)「１回目に上位者、２回目に下位者と組んだ（相手の習熟度が下がった）者と、２回連続で上位者と組んだ（相手の習熟度が変わらなかった）者の比較」の２種類である。

まず上位者に関して、調査１の a)と調査２の 1) 2)の結果を併せて考察する。上位者は下位者と組むと、語数と AS ユニットあたりの語数が多い傾向の見られる一方で、AS ユニット数は変わらなかった。そのため、上位者は下位者とのインタラクションで、より多くの語を個々の AS ユニットに使っていると推測された。やりとりされるメッセージ内容 (message content) の量は変わらない一方で、相手にわかりやすい表現をしようと努めて多くの語を個々の AS ユニットに使い、その結果として語数も増えたという解釈ができるかも知れない。*D* に関しては、上位者も後述する下位者も、全ての調査結果において差は見られなかった。少なくとも対称型クローズドタスクでは、ペアを組む２人の習熟度の差が、産出される語彙の複雑さに及ぼす影響はあまりないと考えられる。一方、問題解決数に関しては、上位者自身の語数と AS ユニットあたりの語数が多いことが直接的に影響したかどうかは断定できないが、上位者が下位者と組むと多い傾向が見られた。本研究で用いた対称型クローズドタスクでは、学習者の話題が非常に限定されるため、語数と AS ユニットあたりの語数の増加が問題解決数の増加につながりやすいのではないかということも考えられる。情意面に着目すると、価値の数値は上位者同士で組む方が高い傾向が見られた。反対に、意図の数値は、下位者と組む方が高かった。相手が自分と同じ上位者であるとやりやすくなり、タスクをする必然性をより強く感じて価値の数値が上がるが、さほど一所懸命にやらなくてもできてしまうと感じて、意図の数値は上がらないのかも知れない。しかし、上位者が上位者同士で組んで価値の数値が上がっても、語数、AS ユニット数及び AS ユニットあたりの語数が増える傾向は、前述したように見られなかった。つまり、価値の数値の上昇とともに、目標言語の産出量が一時的に増えることはなかったと考えられる。逆に下位者と組む方が、自分が積極的に主導しないとタスクができないと感じたのかも知れないが、意図の数値が上がるため、それが語数と AS ユニットあたりの語数の増加に結びついたのかも知れない。

つぎに、下位者に関して、調査１の b)と調査２の 3) 4)の結果を併せて考察する。語数は上位者と組む方が多いという点では、全ての調査結果が一致していた。そして、AS ユニット数は調査２の 4)で上位者と組む方が多く、AS ユニットあたりの語数は調査１の b)と調査２の 4)で上位者と組む方が多かった。上位者と組むことにより、「メッセージ内容の量が増えたために、AS ユニット数が増えてその結果として語数が増えた人」「メッセージ内容の量は変わらなくても、表現を変えて同じメッセージ内容を繰り返したために、AS ユニット数が増えてその結果として語数が増えた人」「メッセージ内

容の量は変わらなくても、個々の AS ユニットにより多くの語を用いて丁寧に説明した結果として語数が増えた人」が混在しているものと思われる。下位者の問題解決数は、上位者と組む方が多い傾向が見られた。下位者自身の語数、AS ユニット数及び AS ユニットあたりの語数が多くなったことが直接影響したのか、単にペアを組んだ上位者の英語による説明が上手だったからか、あるいはその２つの要因が複合的に影響したかは断定できないが、下位者は上位者と組むことにより、タスクの問題をより多く解決できたと考えられる。下位者の情意面に着目すると、意図の数値は下位者同士で組む方が高い傾向が見られた。ただし、努力しようという気持ちが高まって意図の数値が上がっても、２人ともタスクのするために必要な英語の知識や能力が充分ではなかったからかも知れないが、目標言語産出量と問題解決数が増える傾向は見られなかった。これは、上位者が下位者と組むと、意図の数値が高く、さらに語数、AS ユニットあたりの語数及び問題解決数も多かったのとは異なる。つまり、上位者の意図の数値の上昇は目標言語産出量と問題解決数の増加に結びつきやすいが、下位者は必ずしもそうではないとも考えられる。

タスクが学習者の目標言語産出量を増やすことを目指すならば、上位者は下位者と組む方が望ましい。しかし、やっている活動に価値があると学習者が主観的に感じられるようなタスクも長期的な視点では必要であると考えると、上位者が上位者同士で組むことに意義がある。一方、下位者の目標言語産出量を増やすことを目指すならば、下位者は上位者と組む方が効果的である。しかし、積極的に取り組もうという学習者の気持ちの喚起が必要な状況では、下位者が下位者同志で組む方が望ましい場合がある。